山形における生活記録運動

― 1950年代前半までの農村青年の活動を中心に ―

新　井　浩　子
図書館学課程非常勤講師

はじめに

今日、各地で行われている学習実践のプログラムや記録からは「作文」、「文集作り」、「書く学習」など名称はさまざまであるが、書くことが行われているのを確認できる。近年、高齢者や女性の学習として注目を浴びている自分史もこうした書くことの一つである。社会教育における書くことは文章表現力の育成を第一の目的にするものではなく、学習者が自身の生活や経験を書き、それを集団で読み、話しあうこと自体を一つの学習・教育とみなす。これを仮に書きあい、読みあい、話しあう学習とよぶと、そのルーツとして1950年代に隆盛した生活記録運動がある。

生活記録とは、一般の人が自分の生活で見たことや感じたこと、考えたことを書き、仲間と読みあい話しあう活動、もしくは、そうして書かれた文章をさす言葉として使われる。生活記録がもっとも隆盛したのは1956年前後のことで、日本の各地域や職場に生活記録のグループがつくられた。自分の生活のなかの出来事や感じたこと、考えたことを何でも自由に、ありのままに書けばよいというなかで、大勢のひとびとが文章を書き、ガリ版刷りの文集が多数発行された。これを生活記録運動と称する。生活記録運動は1960年前後には勢いを失い「停滞」したといわれたが、知識人ではないひとびとが自らの生活を自ら書いた、日本近代史上でも未曾有の民衆による文字表現活動であった点は見逃せない。

翻って先行研究を見ると、生活記録としてどのような実践が行われたのか、ひとびとにとってどのような学習であったのは充分明らかにされたとはいえない。むしろ1950年代に隆盛した「大衆的な学習・文化運動[1]」の一つとして一括され、いまだ学習にめざめないひとびとがおこなう学習以前の活動という評価しか与えられてこなかった観さえある。しかし先に述べたように社会教育実践においては今日でも生活記録と共通した書く活動が重要な学習として取り組まれつづけている。運動としての盛り上がりはなくなったとしても学習として継承されているということは、社会教育において自分の生活で見たことや感じたこと、考えたことを書き、仲間と読みあい話しあうことが独自の意義を持っていることを示唆する。このように考えると生活記録は、ひとびと

の中から生まれた独自の社会教育実践として、学習論の観点から充分に検討される必要がある。

このような観点から生活記録を考えようとすると検討すべき課題は多いが、まずは実践の掘り起しが必要不可欠である。すでに半世紀がたち資料の確認は難しい状況である。こうした中でも比較的まとまった形で資料が残されているのが山形である。

山形は、戦後生活記録運動の生成過程として注目される農村青年の実践が行われた地域である。全国的に生活記録が盛んになるきっかけとしては1951年の『山びこ学校』の出版と、それに続く生活綴方教育復興の影響が大きい。それらをきっかけに地域や職場で生活記録が行われるようになった。そこから生活記録の端緒を『山びこ学校』と生活綴方教育の復興に求める理解が一般化している[2]。しかし山形では、それ以前からふつうの人が自らの生活について普段使っている言葉で自ら書きあい・読みあうという、生活記録につながる実践が行われていたことが確認できる。それがどのようなものであり、どのように生活記録に展開していったかを解明することが重要であるが、こうした実践はこれまでほとんど明らかにされていない[3]。そこで本論ではまず事実確認を主眼とし、山形で敗戦直後から1950年代中ごろまでに行われた書く実践の事例を明らかにする。

1．敗戦直後の文化活動

山形は、戦前の生活綴方運動の牽引車といわれた北方教育運動の舞台であると同時に、明治期から短歌や俳句などの文化活動が盛んな地域で、大正期にはそうした中から地域文化運動に取り組むものもあった[4]。昭和になると、詩の同人誌や雑誌が盛んに発行されるようになる。特に1933年は「続々と詩誌の創刊された年」で、その後5年間は「詩人によってあるいはグループによってそれぞれの詩運動が展開された」[5]。このような文芸活動は、戦争の進展に伴い不可能となったが、敗戦後は、戦時中に疎開してきた文化人と交流を持ちながら、再び多数の同人誌や文芸誌が発行されており[6]、地域の文化活動が生活記録の一つの基盤となったことがうかがえる。

その例として、東南村山地区で文芸活動の中心となった本沢村（現山形市）がある。本沢村は、歌人の結城哀草果や、疎開していた中西悟堂や今泉篤男（美術家）が在住しており、こうした文化人が地域の文芸活動に協力した。1946年に発行された＜水鶏＞の表紙は、今泉が一部一部を彩色版画し、中西が詩を寄稿し、結城哀草果の短歌や、真壁仁の詩が掲載されるという質の高さである。また、青年の文化活動も盛んであった。

＜水鶏＞の創刊と同年の1946年に、本沢村を生地とする無着成恭は、斉藤二良と共に＜草酣＞を創刊している。＜草酣＞は主に俳句・短歌・詩の文学サークル誌であったが、これ以外にも青年や学生たちによって＜どっぴつ＞や＜四次元＞などの雑誌が作成され、青年たちによる作品活動が行われていた。

1950年代に全県的に行われるようになった農村青年の生活記録と比較すると、敗戦直後の本沢村の地域文芸活動は、はるかに芸術性・理論性が高く、参加した青年も限られている。しかし、同人雑誌では、敗戦後の青年の生き方や農村復興などが論じられており、地域で仲間と文章表現活動を行う経験として生活記録の基盤をつくるものであったといえよう。それを示す証言として、本沢村の＜どっぴつ＞グループのメンバーだった青年は、地域の文芸活動によって本沢村には「生

活の悩みを書きあうような素地があった」[7]と後に述べている。

2．長瀞村同志会の活動

(1) サークルの結成と文集の発行

敗戦直後に行われた地域の文芸活動は数年立つと行われなくなっていき、直接的には生活記録には結びついていかない。これに対して、「山形県で最初に生活記録をしようとした農村青年グループ」[8]とされているのが、長瀞村（現東根市）の同志会である。

1946年に長瀞村では、部落ごとに青年会を結成して道普請や苗代の消毒、盆踊りなどを開催していたが、おなじころに農学校の生徒だった青年たちが数名あつまって「同志会」というサークルを青年会とは別につくった。彼らは集会所として小学校を借りることとし、そこから青年教師の石垣邦雄と会う。長瀞村は、戦前に国分一太郎が生活綴方を実践していた地域で、国分は1939年まで地区の長瀞小学校に勤務していた。石垣は国分の教え子の一人で、国分が生活綴方教育として作成していた学級文集『もんぺの弟』に作文や詩を載せている。須藤克三によると、1946年当時には教師になっていた「国分の教え子たちが集まって『なにかやろう』として」おり、それが農業高校や青年学級に行っていた青年たちが学校に集まりグループをつくる支えになっていた状況があった[9]。

青年教師たちの意欲を高めた要因の一つと考えられるのが、村山俊太郎である。村山は国分と同様に、戦前北方教育運動の一員として生活綴方教育をリードした山形の綴方教師であった。彼は1946年に天童小学校に復職し、山形教員組合副委員長として組合運動を指導したが、1947年10月に病のため妻の実家がある東根市三日町に転居した。それ以降、1948年12月になくなるまで、北村山郡内の青年教師や農村青年らと交流した[10]。石垣も、村山と交流を持っていた[11]。このような、戦後の青年教師に対する、戦前の綴方教師の影響については、いまだ明確な事実の確認や考察が行われていないが、その働きは無視できないものがあると考えられる。

同士会メンバーの青年たちは、宿直室で石垣を指導者として、「学習会のようなものをはじめ」た[12]。この時、青年たちの関心の中心になったのは、生産や農村問題であり、これを中心に学習は行われたが、そのなかから自分たちの農業生産の記録をとろうという意識が生まれる。同時に会では「同志会」回覧ノートをはじめ、これが後に文集＜みんなのこぶし＞の発行へと繋がった。

(2) 文集＜みんなのこぶし＞の内容

文集の正確な創刊年月やその内容については、資料の欠如によって確認できない。資料が確認できた＜みんなのこぶし＞4号は1949年2月に発行されている。内容をみると、短歌、詩、散文が掲載されている。散文の題をいくつかあげると、「農村に欠けているもの」、「選挙雑感」、「或る一夜」、「真の友」、「屋根裏」などである。いくつか例をあげよう。まず「日本人の悲劇」と題する詩は以下である。

「ネクタイも服も帽子も真新しい颯爽とした姿でメリカンに化けている

日本の生ぬるい人々！！
（中略）
でも悲しいかな尻尾があるよ
いかにメリカンになりすましても
耳の間に短かあい（ママ）
吸い残りのタバコなど挟んでるじゃないか
黒く汚れているのも知らないで
（後略）」

これは敗戦後に一転してアメリカ礼賛に変化する日本人の様子を、山形駅での情景をとおしてうたったものである。この他に「農村に欠けているもの」では、「百姓に学問なぞいるものか、いかにこの声に若き人々が悩まされ農業自体の発達が妨げられているか」として「農業の合理化へにはまず第一に学問呪詛の叫びを根絶せしめよ（中略）青年よ農業科学の研究をなせ」と訴えている。

このように<みんなのこぶし>は、自分たちの生活のなかで見たことや感じたことを書くという、生活記録の特徴がある程度見える。

(3) サークルの解散と「同志会」における書く活動の特徴

青年会とは別のサークルとして活動をはじめた「同志会」であったが、その活動が活発になるにつれて青年会との摩擦が起こるようになる。サークルのメンバーは青年会を脱会する事態となるが、同時期に青年団内部から青年団の改革が問題となり同志会のメンバーもそれに取り組むこととなる。そのためサークルは1950年前後に解散した。

長瀞村「同志会」における書く活動の特質としては、以下のことがあげられる。第一は、文芸的な要求や目的というよりは、生産や農業問題への関心から書くことがはじめられたことである。「同志会」では、農業簿記の記載が必要と考えられて、書くということがはじめられており、ここには生活綴方教育のなかで行われた「生活記録」的な要素がみられる。

第二は、書くことが活動のすべてではなかったことである。「同志会」サークルは、学習会や回覧ノートだけではなく、読書会や演劇活動も行った。特に演劇は、青年団でやくざ芝居が盛んに行われていた中で新劇にとりくみ、1947年の東根地区青年会の文化祭では宮沢賢治脚本「植物医者」を演じて、疎開していた大山功らから高い評価を得た。サークルメンバーには、やくざ踊りと喧嘩がおこりがちな青年会と青年たちに対して新しい青年活動を模索する意識があり、それがサークルの結成や学習会、新劇活動として行われていた。書く活動もその一部であった。

第三は、自分たちの生活のなかで見たことや感じたことを書くという生活記録の特徴が見えるものの、日常使用している方言をそのまま使用して書くような文章はあまりない。すなわち、文章としては評論や随想的な性格が強いことである。

同志会のメンバーであった奥山忠雄は後に、「仲間の中で、綴り方や演劇の目的、方法について

激論をたたかわせた。しかし、論判するだけで論理的に体系づけられていなかった。[13]」また、1950年代前半には、長瀞村の周辺でも青年による文集が発行されたが、その存在も知らなかったし、交流もなかったと述べている。1950 年代前半には県内の生活記録運動が盛んになってくる。中でも長瀞地区では多数の生活記録サークルが活動をしただけでなく、各地のサークルの交流を目的とした文集<新しい土>が発行され、山形県の生活記録運動の中でも重要な役割を果たすようになる。しかし、「同志会」が活動した1940年代後半～50年にはまだ生活記録という概念もなく、したがって目的や方法論もなかったということである。そのなかで自分たちのサークル活動の一環として生活を書くことが行われていったのである。

3．若木地区の活動

(1) 青年会の結成

長瀞村の同志会サークルの場合は、石垣邦雄という青年教師の関わりがあり、地域にも戦前の生活綴方教育の経験があった。こうした経験や指導者もないなかで青年たちがグループをつくり、書くことが中心的な活動となっていったのが若木東根市若木(おさなぎ)部落の青年たちである。若木地区は、山形の中でも特別な歴史と条件を持つ地域である。それは開拓部落であることと、戦中から軍事基地への土地の接収が行われたということであり、こうした状況が青年たちの活動にも大きな影響を与えた。

若木の開拓が始まったのは、1869年～1870年であるが、その後、三回にわたって集団入植が行われた。1944年には、日本海軍が航空基地建設のために約50町歩の入植地を接収した。1946年6月に進駐軍が神町に駐屯すると、さらに163町歩にも及ぶ入植地が接収された。あわせると全入植地の半分にあたる約212町歩がうしなわれることとなった。そのため、入植したひとびとは零細経営を余儀なくされたのである。

新しく開拓された若木には青年会の組織も伝統もなかったが、1948年に豊栄青年会が結成された。当時会員は40名ほどで、会員の年齢は18～25､6才までであった。1949年には、機関誌<自然>を発行した。これは散逸しており資料として確認することができないが、「なんでも好きなものを書いてみること」から始めようとしたものといわれている[14]。しかし<自然>の発行後、書くことは青年会の活動の中心にはならなかった。むしろそれ以外の、映画鑑賞会や素人演劇会の開催、部落の水路工事や共有地での豆の栽培、果樹の剪定などを行うようになる。その背景には貧しさのなかで生活の楽しみを見出そうとする青年達の動きがあった。青年会のメンバーであった槇仙一郎は青年会をつくった理由について「開拓ぐらし」という題で、以下のように書いている。

> 「昭和二十三年の秋から、中学を卒業したばかりの青年たちが、借金の返済と生活費を補うため、東京方面にかせぎに出るようになってきた。
>
> 『会長さんよ、あしたの晩、静岡さ働きにえってくっから、来年の春まで青年会休ませでけらっしゃえ。』
>
> 六人で行くというのである。なにげなく私はこんなことをいってしまった。

『武田君よ、出かせぎなどえがねで、冬ばり本気になって、百姓のこと勉強やって見だらええんねべが。』

すると武田君は、ムッとなって、

『槇さん、はえずは、銭ある人の考えよ。』

『ほんとだ、槇君のどごで田作ってえっから、米買って食わなくてええのだものなー』

穴の中にはいっていきたいような思いだった。一年食うだけ飯米があって、年に三万円の借金している、自分の家のことを考えて見ると、武田君がムッとなるのも当然だったのである。」[15]

こうした経済状態の中で、青年会は若者たちにとって一人ではできない娯楽を集まって行う要素が強かった。しかし親たちから飲食代とするならば青年会への助成はしないと批判されたことをきっかけに、青年たちは部落の共同作業を行って青年会の資金を得ることを考え、実行する。その過程で青年会としてまとまって部落のおとなたちにはたらきかけるようになっていった。例えば、村の一人が、氏神として稲荷神社を設置して祭りを行おうとしたのに反対する人たちが祭りへの参加を拒否して畑に出るというときに、青年会は「同じ部落であり、祭りは部落こぞってやるべきだということになって」反対派の人たちのところへ話し合いに行き、説得した[16]。

(2) 書く活動の活発化とその背景

青年会の活動が行われる中で、女子青年たちから農閑期に部落内で和裁を習いたいという希望が出されるようになった。これをきっかけとして、1952年の秋に青年学級が誕生し、のちに男子も参加するようになる。当初の学習内容は、そろばんや農業技術などであったが、それに加えて村の中の恋愛や男子の出かせぎ、政治などに展開していった。それと平行して書く活動も充実していく。

若木で書く活動が充実するのは、1955年前後になってからである。<自然>の発行から5年後の1954年2月に文集<おさなぎ>が創刊された。しかし創刊号は地区の分教場の生徒の作品を編んだもので、青年の文章は掲載されていない。同年8月に第2号が発行され、これには青年の文章も掲載された。1955年2月に第3号が発行され、同年12月からは「かいらんノート」をまわしはじめた。翌1956年6月に第4号が発行されたが、特に第4号は、掲載された文章の質も量も充実した生活記録の文集となっている。

書く活動が行われるようになった背景としては、二つの要素が考えられる。第一は、1951年に青銅社から発行された『山びこ学校』の影響である。青年会の会員であった植松要作は、『山びこ学校』をみんなで読んで感激して自分たちもやろうとなったと述べている[17]。第二は、基地反対闘争の高まりである。1952年に、日米安全保障条約にもとづく日米行政協定が調印されると連合軍は在日米軍として国内に駐留することとなり、日本政府は「土地等の使用に関する特別法」などの特別措置法を成立させて、米軍への基地提供をする条件を整えた。これによって米軍基地の土地接収が半永久的に行われるかもしれない情勢となり、各地で基地拡張のための土地接収と軍

事基地による被害への反対運動がおこる。

山形でも神町にキャンプが置かれ、北村山郡戸沢村（現村山市）にいわゆる大高根試射場が設置された。これによって若木では開墾した入植地が接収され、炭焼の山が試射場の着弾地となって立ち入りが不可能になった。若木でははじめ、代替地と補償金の増額、接収民有地や接収地以外の不法使用に対する補償金要求を掲げていたが、1952年以降は耕作権に対する補償要求を掲げた。基地反対闘争は高揚し1954年10月には総決起大会が行われ、神町キャンプ正門前への座り込みが実行された。

若木の青年会も、青年行動隊や女子青年行動隊を組織して闘争に参加したが、その過程で他地域の青年たちとの交流が行われる。1955年6月には、山形・山元・本沢・長瀞・戸沢の各地域の青年たちと交流を行ったり、メーデーに参加したりした。こうした展開について、会員の植松要作は以下のように述べている。

「私たちは開拓生活の長い期間、生活の土台作りにすべてをささげてきました。当時の食糧難ははなはだしく、水田ももたない私たちの開拓地は、配給米に頼っていたのですが、とてもまかないきれず、じゃがいも、さつまいも、野草の類で食をみたす長い期間がつづきました。

土地は酸性でおまけに夏の乾燥がはなはだしく、満足な収穫が得られませんでした。そこで私たちは、一年作物に頼る方法を捨て、りんごを主体とする果樹を植えはじめたのです。そうして営農の計画が軌道にのってみますと土地がたりません。入植当時四～三・五ヘクタール平均の配分地であったのが、占領軍に接収されたために、半分の一・八ヘクタール程に減らされてしまっていたのです。

そこでようやく、開拓部落全体で米軍・県の外事課、調達庁を相手に補償運動、土地返還要求を起こすのですが、私たち青年も、行動隊として、その行動に参加し、多くの矛盾に体ごとふれました。

それまで私たちは文集『おさなぎ』に、自分の身辺、家庭の周囲の矛盾を書きつづけてきましたが、もっと大きな、基地問題が抱えている権力と民衆、平和と戦争勢力といったものに目を向けることになったのです。」[18]

このように基地反対闘争は地域を越える問題に青年達を直面させ、さらに基地という共通の問題を通して他地域の青年と交流するという経験をもたらした。そこで見たことや聞いたこと、感じたことが、改めて「書く」ことにとりくませたと考えられる。

(3) 文集<おさなぎ>の内容

それではどのようなことが書かれたのか、第4号を中心に少しくわしく見ていきたい。

まず目次を見ると、「巻頭の詩」、「かいらんノート」、「農協はどうなっているか」、「若妻学級について」、「裁縫実験記録集」、「声」、「食生活について」、「付録『三人姉妹の婿えらび』」で、総ページ数は65ページである。それぞれの内容をみると「かいらんノート」は、前年12月から実施し

た回覧ノートの21人の文章を載せたもので、その目的について植松要作は以下のように述べている。

「おれたちは『心に思ってることを、かくさずに語り合って、一人の悩みを、みんなの悩みにしてゆこう』と言ってきた。が、ほんとうの心のそこの方では、だれにも言えないことを、いっぱいしまっていて、一人でがまんしているのではないか。」[19]

このように、回覧ノートの目的は「自由に思っていること」を書き合うことであり、自分が「その時感じたことをすぐ書いて」みることであった。植松の呼びかけに続けて書かれた他の会員の文章をみてゆくと、「気持ちがむちゃくちゃでかけない[20]」という文、家のりんごの木が誰かに切られたこと[21]、色のついた夢を見たこと[22]、青年学級の和裁学習のこと[23]、また、資金がないため手術後に十分入院することができなかった親戚の嫁がとうとう亡くなったこと[24]、米の配給について[25]など、個人個人が生活の中で注目したさまざまなことが、文章で表現されている。

「農協について」は、農協の販売事業についてその実績データをあげて問題提起している。さらに、地区に共同選果場を設置する計画についてのアンケート表が掲載されている。「若妻学級」については、開催されるようになった若妻学級への希望を述べている。「裁縫実験記録集」は、もんぺとふとんの作成方法について、生地の裁ちかたから綿の入れ方まで図入りで解説している。「声」は、会員が実施したアンケートの結果だが「わざと統計にしないで」各自の意見を掲載している。

「食生活について」は副題に「学習として」とつけられており、はじめに以下のようにその目的が述べられている。

「私達が、丈夫な体で元気よく働き、楽しくみんなと笑い顔を合わせるには、毎日々の食事に注意しなければいけません。けれども、私達は一日の仕事に追いまわされて、三度の食事も、そゝになりがちで、『朝も昼も大根漬てでまにあわせろはァー』と云うような事になってしまいます。

又栄養などゝ云うと、金や手間のかゝるものだと一寸早がってんしてしまいますが、そのことよりも、平均のとれる食生活をすることが、大切です。」[26]

内容を具体的にみてみると、①おとなが一日に必要な栄養と望ましい食生活の例示、②保存食の調理方法、③食生活の実態調査の結果、④現金収入の少ない冬期にも実施できる食事例の考察、⑤改善した献立例について述べたあと、最後に「食生活について話し合って（中略）家族のものと相談して献立表を作ってみましょう」と呼びかけている。

「付録『三人姉妹の婿えらび』」は、前年の「部落と青年の集い」で上映した「共同創作劇」の脚本を掲載したもので、作者として9名があげられている。

第4号を通して、<おさなぎ>の実践の特徴を三点、言及したい。第一は、青年会と青年学級を通して青年たちが、自分たちの生活に密着した活動を行っている。第二は、第一をふまえて、書く実践は多様なものである。どのように多様なのか、掲載された文章を、書くときに重視した

と考えられることから区分してみる。

まず、「かいらんノート」は、ひとりひとりが「自由に思っていること」、自分が「その時感じたことをすぐ書いて」みることである。「農協について」や「裁縫実験記録集」、「食生活について」は、自分たちの暮らしを対象としており、生活の改善や向上を目的とする、自分たちの暮らしの調査研究である。一方、「若妻学級について」や「声」にも、暮らしの調査研究としての性格があるが、それに加えて、人びとの声を浮かび上がらせ、取り上げた事柄に対する人びとの関心を増そうという意識があるのがうかがえる。さらに「三人娘の婿えらび」は、創作、すなわち文学的な表現方法・形態を活用している。但し、この場合も扱うテーマ、使用される言葉、登場人物や状況などは、自分たちの村そのものである。

特徴の第三は、こうした多様な書く実践が行われる文集が、青年たちの活動の集大成であるとともに、活動のメディアともなってきていることである。特にこれを端的に示すのは、文集の表紙で、タイトルの下に「おれたちの教科書」と書かれていることである。

(4) 若木における書く活動の特徴

以上、若木地区の活動を見てきた。ここにみられる書く活動の特徴は三つある。第一は、自分たちの生活における望みや欲求を、基盤に活動が行われていったことである。本沢村や長瀞村とは違い、開拓部落である若木には文芸活動や生活綴方教育の経験がなく特別な指導者もいなかった。そのなかで青年たちの組織として青年会が作られ、部落内の共同作業や生産作業の過程で青年会としてのまとまりが形成されていくには、生活上の問題を取り上げていくことが必要不可欠であったと思われる。

第二は、互いの生活の共有と互助性が強いことである。青年会の活動をはじめたそもそものきっかけは、青年会の資金稼ぎであったし、学習や文集の内容も、自分たちの生活の向上に繋がるものが求められている。しかしこれをたんなる実用主義とするのは軽率であろう。青年会の資金稼ぎでも、単に自分たちのためだけではなく部落全体の役に立つことを行っていったのは、厳しい開拓地で生活の中で互いの生活の苦労を分かり合っており、青年たちも村づくりに参加する必要性を感じていたからと考えられる。これについて槇仙一郎は以下のように書いている。

> 「みんな団結しよう。などと最初から、ちかいあったわけでもないのに、いつしかおたがいの腕と腕が、がっちりくまれていったのである。
>
> 七十二戸の家にすんでいるこの人々は、全部が唐鍬をふりあげて、開墾しないものはなく、全部がいもがゆの味を知っている者であり、全部が肥料屋に肥料代の借金の弁解を何十ペンとやったことのある人であり、そばであるいは障子のかげできいたことのある人たちだけなのである。」[27]

第三は、書く活動が中心的に行われるようになったのは、会の結成から5年以上経った1950年代の半ばで、この背景として『山びこ学校』の出版と基地反対闘争の経験があったことである。若木では、書く運動として生活記録が導入されて、それによるグループ作りが行われたのではな

かった。青年会の活動の一環として行われていた書くことが、「このまんまじゃしょうがない」「まとまった考えを発表しよう」という点からもう一度着目されて行われるようになったのである。

おわりに

以上、全国的に生活記録が注目される以前の、敗戦直後から1950年代中ごろまでに行われた山形の三地域の事例を見てきた。これらの事例から山形における生活記録生成の背景とそこにみえる要素をあげる。第一は、山形では敗戦直後に戦時中に疎開してきた文化人との交流のなかで多数の同人誌や文芸誌が発行されており、青年も参加していた。活動は継続しなかったが、こうした地域の文化活動が生活記録の一つの基盤となったことがうかがえる。第二は、青年たちのグループがつくられて、そこで書くということが行われていった。第三はその場合、そもそもは生活記録を書くことがグループ活動の目的ではない。グループ活動の中の一つとして書くことがとりくまれた。第四は、書くことにおいては自らの生活に役立つことが志向された。互いの理解を深める、意見を聞く、データを集める、情報を伝える方法として書くことが取り組まれている。すなわち地域のグループ活動の中から行われるようになったものであり、生活との関係が深く、さまざまな活動と一体であることを生活記録の原初形態として確認することができる。これらから、敗戦直後から1950年代中ごろまでの山形の生活記録は自然発生的であるが、それゆえ生活性、実践性が高かったと言えよう。

全国的な生活記録運動の隆盛に伴い、山形でも1950年代中ごろから生活記録を書くグループが多くなる。生活記録を書くことが主要な活動となった青年団やグループの例も多い[28]。そのなかで、本稿で確認した生成背景にある要素が継承されたのか、されなかったのか、今後の課題として実践の事実を明らかにしながら検討する必要がある。

1　日本社会教育学会『現代社会教育の創造』東洋館出版、1988年、18ページ。

2　牧瀬芳江「生活記録運動の歴史・定義」（日本作文の会『生活綴方事典』明治図書出版、1958年、439ページ）。

3　須藤克三「生活記録は歴史をつくる－山形県農村青年の生活記録運動」（『戦後社会教育実践史第1巻』民衆社、1974年、99～114ページ）。

4　山形県芸術文化会議『山形県芸術文化史』1973年、97ページ。

5　同前、109ページ。

6　『山形県史第6巻　現代編上』573～576ページ。

7　山形県国民教育研究所資料「生活記録運動史」12ページ。

8　須藤克三「農村青年の生活記録サークル」（<文学>1959年10月、73ページ）。

9　山形県国民教育研究所資料「生活記録運動史」前掲、16ページ。

10　「村山俊太郎年表・著作目録」（村山士郎『村山俊太郎　生活綴方と教師の仕事』桐書房、2004年、387～395ページ）。

[11] 浦山克彦「一つの戦後史　青年たちの生活記録　その一」(<公論やまがた>1973年2月、14ページ)。

[12] 須藤克三「農村青年の生活記録サークル」(前掲、73ページ)。

[13]「一つの戦後史　青年たちの生活記録　その一」(前掲、16ページ)。

[14] 須藤克三『村の青年学級』新評論、1955年、75ページ。

[15] 槇仙一郎「開拓ぐらし」(真壁仁『弾道下のくらし』毎日新聞社、1956年、214～215ページ)。

[16] 同前、217～218ページ。

[17] 浦山克彦「一つの戦後史　青年たちの生活記録　その二」(<公論やまがた>1973年3月、19ページ)。

[18] 植松要作「生活記録運動と仲間づくり」(<社会教育>NO.67、1963年6月、36ページ)。

[19] 植松要作「心をひらこう」(<おさなぎ>1956年6月5日号、2ページ)。

[20] 太田成子「ノートがまわってきて」(同前、3ページ)。

[21] 塩野謙作「切られたりんごの木」(同前)。

[22]「夢と色」(同前、4ページ)。

[23] 高田和子「明るい歌　美しい夢」(同前)。

[24] 槇仙一郎「どんな嫁がいいか」(同前、5ページ)。

[25] 今田正義「米と赤字」(同前、6ページ)。

[26]「食生活について」(同前、49ページ)。

[27] 槇仙一郎「開拓ぐらし」(前掲、218ページ)。

[28] <ぬなは>(西川町沼山青年団)、<あゆみ>(最上町本城青年団)、<イグサ>(山形市片谷地)、<どてかぼちゃ>(山形市柏倉門伝)、<新しい土>(村山東根)等。

本稿作成にあたって、山形県国民教育研究所、齋藤たきち氏に助言、資料提供の御配慮を賜りました。ここに記して、感謝いたします。